

熊本大学学術リポジトリ

Kumamoto University Repository System

Title	うつせ貝 : 新体詩 : 文苑
Author(s)	坂本, 星陵
Citation	龍南會雜誌, 107: 45-47
Issue date	1904-10-28
Type	Departmental Bulletin Paper
URL	http://hdl.handle.net/2298/5714
Right	

高きに立ちて擗げたる

經のおもては日にてりて

四方にまばゆき光あり

疲ると見ゆし野の民は

自ら知らぬ力得て

一ふり高くふるや鎌

日は落ちぬいさふみの戸をささずきて

ひやくえ 白衣とぬぎふ聖徒ひさむれ

闇色衣身にまどひ

立つや聖徒の影はのか

民はあらしのあとのごと

心しづかに野をねりて

ふたゝび堂の前に立ち

生命の冊をながめたり

夜はふけて神のみきふす木の下に

いのちとあぐる聖徒ひさむれ

祈禱の聲はまざれつゝ

星の雫の音しげく

葉うらに低きさとしあり

神の乳房によりそひて

わが世忘れし野の民は

慈相のかげにぬむりゆく

うつせ貝

坂本星陵

淋しき波の音を立てゝ

暮れ行く干瀉はて遠く

吾れを乗せ來し夏潮は

闇のあなたに落ちにけり

戀も涙も明日よりは

冷たき砂にそゝげとや

磯に身を伏せうかがへば

響くは遠き海の音

かなしき波の音をさきて

愁にとざす貝からも

其かた／＼と別れては
とどぎす殻なきうつせ貝

せめてと殻に残りたる
冷たき水に影おとす
夕の星を抱きつゝ
藻草の床に夢を見る

さめては何を思へどや
貝にたたへし水の面
寒き夜風にくだかれて
藻草の床の夢は破れぬ

○物の影

ある日夕のさすらひに
ふと吾得たる物の影
我か世ふりにし名のまゝに
呼ばんは惜しきまほろしと

池の面込めし靄はれて
あした粧まきひ美しう
世の媚知らぬまなざしに
生れて清き藻の花か

この世のものに譬へむは
あまりに清き姿かな
星の几帳の奥深く
召されし魂やぬけ出でし

白雨ゆふだちはれし夕まぐれ
天と地つちとの中つ瀬や
七色虹の橋の上に
さすらふ影のそれぞとも

もとより物の影なれば
繪絹に包む灯影かな
追ふとはすれど果てしらず
歸るは淋し吾れの胸

形もあらぬ物の影

さてしも何のまよはしぞ

昔の夢のめぐり來て

緋挑の花とさめたりや

かくもゆかしき物のかげ

忘れぬまゝにさらばとて

芙蓉の雫筆に得て

何とほしらすかく繪像哉

和歌

古鏡

奈良さなから錦につゝむ古鏡天平ふりて光堂さびぬ

星陵

小石にも靈あり人よぬかづけど二百二十寺鐘なり渡る

杉もれて朱の廊てらす秋の日や春日乙女の白衣緋の裳

金泥の古き繪巻とさながらに開けば奈良は七重に光る

さながらにいにし都の幻人鹿に餌やりて興がる吾が身

(以上奈良のうたの内に)

吾涙せめて七ツの花と咲きて秋立つ君かみ墓を守れ

(人の計なきにて)

野に立ちて我れにははるむ花あらば名なし小草も冠にさゝむ

吾れによきは月細き夜を笛さげて君が家に内る萩さく小道